涼

岡部伊都子

家の背、北側の山壁ががさっととり去られたら、急に風が涼しく通った。十四、五メールの切ったての山はだは、あらあらしいナマの土をむきだしにして、私のうしろにそそりたっていた。

南は海を、北は山をひかえている神戸の東の端で、大阪湾の月をながめてはやわらぎ、切ったての拒絶にあっては心をひきしめて暮してきたこれまでであった。

たったふたまの、小さな小さな住いだけれど、旅へ出てもここほど落つける場所がないので、仕事以外に旅を思うことはなかった。

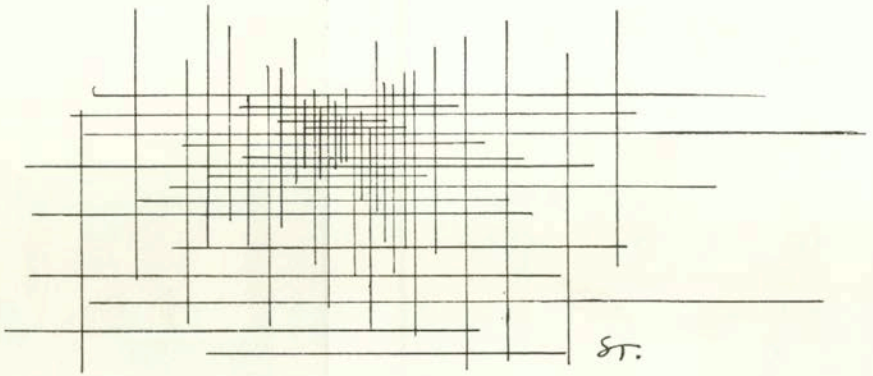
だから、どんなに暑い夏でも小さな家の小さなひと部屋に、飽きもせずこもっている。

それが心の涼であり、また、身体の涼でもあった。文明の利器は大世帯にあると便利に活用できるのだろうが丈ひとりの暮しにはかえって手数のかかるわずらわしさがある。洗濯機も、掃除機も、冷蔵庫もない。扇風器さえない状態で、それでも結構、涼しく過していられる。南の風をうけるだけでも扇風器なしですこせたのに、北の壁がなくなってすうっと風が通うと、へえ、こんなにとおどろくばかりだ。

しかし「裏の山が切りだされたそうで、おめでとうございます。」などとお電話を下さる方があるのだが、それがどうも心重い。この切ったては水防、砂防の上からいうと危険なものだったから、それが平坦な宅地にかわることは、安全の上にも、地価高騰？の上にもよいと人々からは思われるらしい。だが、私は、この切ったてを心から愛してここに住いを定めたのであった。

繊細なもの美々しいものに心傾きがちの私を、この荒土がどんなにしやっきり、その甘さを拒絶してくれたことか。土砂くずれどめさえしてあったら、そこは永遠に、そのままであってほしい願いだった。

未開の地を、どんどん宅地化してゆくことは、今の状態では必要なことである。私は自分のそんな願いがまことに身勝手なものと知っているから、裏の開発で、新し



い街のひらけることはうれしいと思う。ただ、もう二度と私の身近かにそそりたつことのないあの荒はだの山壁を、愛惜する心は、どうすることもできないのだ。

南にも家が建って、海は見えなくなり、心のよりどころである裏山も失われた。ここへきて三年―はじめてしくしく旅へ誘われる気持である。この地に住む意義を喪失したような気さえする私は、心の落着きをもとめてさまよわねばならない。

〝涼〟は〝静〟でもあろうか。

どんなに気温低く、風情の涼しげなところにでかけても、心が静かでないと、絶対に涼しくはない。それに騒音はあつくるしくて困るし、人間が多いのもかなわない自分が人間の一人であることを棚にあげての人ぎらい、結局、あまり人がいなくて、くるまがはいらないし、スピーカーががなりたてない田舎びたしづかさを愛して、布引の滝を散歩することは、ひと夏に、二、三回。水が好き、とくに、激しい気魄にみちた滝が好きで布引にゆくのだが、ひとりでさっさと歩き、帰ってくるだけだから何のこともない。

「神戸っ子」編集長の五十嵐嬢は、私が相楽園の在り場所すら知らないのに呆気にとられていらしったが、神戸っ子の中にいれてもらって七、八年、ほんとにどこも知らないし、どこへゆきたい、どこを知りたいとも思わない。それでいて神戸が好きで、これはやはり、大阪生れの私自身、大阪の良さ悪さに肉親でありすぎるように神戸の生えぬきの人よりも、自由な心で神戸を愛せるからだろう。

〝涼〟は追うものではなく、自らつくりだし、味わうものだと思う。身体と心とは、どうしようもなくひとつであるから、私にはまず心落ちつく瞬間が大切である。今年の夏は、何をどうよろこびとするか、それは私自身わかりようのない未来だ。

（随筆家）

オシャレをたのしむ帽子の店

マキシン

トア・ロード TEL③6711～3

御贈答には
もらって喜ばれる品を

元町2丁目 TEL ③ 2996

随想

旅の効用

辻　久子

旅行といいましても、いろいろございます。物見遊山の旅もあれば、商用の旅もありましょう。また、あてどもなくただぶらぶらと各地を歩き廻るのも一つの旅行に違いありません。

普通に旅行といえば、異った土地に行き、変った風物に接して、おいしい食べものがあり、何かと心楽しいもののように考えるのが一般的のようですが、残念ながら私には、そういう経験は皆無に近いのです。

御存じの通り私は演奏家ですから、年中…とは云いすぎですが、少くなくとも年間の半分以上は演奏旅行に出かけています。東奔西走という言葉が、文字通り当てはまるような、いそがしい旅行がいつも続きます。ひどいときには、今日は北海道で演奏して明日は東京、その翌日は九州へ飛ぶというようなことさえあります。こんないそがしい旅行をしていてはたとえ一、二日の体のあいた日があっても、物見遊山してみたいという気持は湧いて参りません。つかれを休めるために一日中旅館にとじこもっています。

性来私は出不性です。そして一つのことに熱中すると、途中でほかに気をとられたりすることのできないたちの女です。ですから、旅行に出ても、目的の演奏会がすむまではどんなに時間的な余裕があっても、演奏以外のことに気をとられたくありません。地方では有志の方がよく名所旧蹟の見物に誘って下さるのですが、いつも辞退申し上げている状態です。旅行で面白かったこと、楽しかったことなどをよく新聞、雑誌社の方から聞かれますが、返答に窮してしまいます。駅へ着いたらすぐ旅館へ、そして演奏会場へ往復してまた駅から次の土地へという無味乾燥な旅をつづける私には、つらい思い出こそあれ、甘い旅の思い出はほとんどありません。

いつの日か、人並みの楽しい旅行の味をあじわいたいというのが私の念願です。

（バイオリニスト）

氷室にて

野中春水

扇子、団扇はもちろんのこと、もはや扇風機なども斜陽族、ルームクーラーなどといった冷房装置がはやりだし、涼を納るる人智も日進月歩のありさまである。

電気冷蔵庫にはいつも清潔な氷がたくわえられているが、おもえば昔は、夏日の氷はまさにその稀少価値において貴重なる存在であった。枕草子一本に『けづり氷(ひ)のあまづらに入りて』との表現があるが、この文面によりすれば、ぶっかき氷に密をかけるのではなくて、『あまづら』(蔓草の甘い液汁)のなかに氷の破片をうかすのである。珠玉に対するおもいを秘めて王朝人はその氷片を愛したことであろう。

人造氷のなかった往古では、天然の氷を貯えて夏日の用を供したのである。この貯蔵所がいわゆる氷室(ひむろ)と呼ばれるものである。しかもその日本最初のものとして、わが神戸にあるものがつたえられている。市バス石井町五丁目下車、西北へ爪先きあがりの道を約十分、山かげにひっそりとした宮がある。即ち氷室神社(氷室町二丁目)である。同社の由緒書によれば祭神を仁徳天皇とし、かねて平清盛の兵庫七弁天の一社として弁財天をもまつるとのことである。その本殿の左側をさらにのぼると境内社として、稲荷さんがあるがその階段の左下、岩にたたまれた洞穴がある。これがその氷室遺跡とつたえられているものである。日本書紀の記載によると仁徳天皇六十二年(西紀三七四)額田大中彦皇子(ぬかたおおなかつひこのみこ)がこの地に狩をした時に、一つの小屋を見つけた。里の長に問うたところ、「これは氷を貯える所で、氷を茅や薄などの草で包み、土中に入れて貯蔵するのです」とこたえる。そこで皇子はよろこんで氷を天皇にたてまつったとある。以来、例年献納のことが行なわれたといわれる。

今その洞穴は、山麓の樹蔭にひそやかにしずまって、清らかな水を浅くたたえている。しばらく対していると万古の冷気が自ら流れくるのをおぼえる。原始素朴の代の風趣がいじらしいまでに身に迫ってくる。時の流れは一千有百年、思えば今のこの世に生をうけたわれらの、如何に恵まれたことであろうか。まことにありがたき時代である。けれどもまた。この物質文明を謳歌する一面、時に古い祖先の苦難の日を回想し、われらの生活自体に反省と敬虔の念をもってむかいたいものである。われらの享受する恩恵も、長い年月の苦難の蓄積の上に成りたったことに思いをいたしたいものである。

例年正月、寒の入りの頃に、製氷会社や氷組合の人たちによってこの社前に祭りが催されるとのことであるが、まことにゆかしい行事である。そうした人間性の上にたって、日々を新しく培ってゆきたいものである。

(付記)
仁徳紀の氷室遺跡を奈良県山辺郡都〇の地とする説があるが、西摂大観などに説く論により神戸夢野説に従いたい。

(神戸大学文学部教授)

きものさろん　西店
服飾細貨　東店

おんがら屋

神戸・三宮　西店　TEL③8836
センター街　東店　TEL③0629

コピーが
手もとにもどる
新鋭複写機

コピーが自動的に
手もとにもどる
新しいシステムで
場所を取らず
座ったまゝで
操作が容易です。

正価¥一七五、〇〇〇

ミルタ　複写機
コピーマスター
合同タイプ

御希望の方に
カタログ進呈

神戸市生田区三宮町3丁目8 TEL③1238・4121
（神戸大丸上るトア・ロードセンター街西入口西側）

連載 第四回

ここに神戸がある

六甲山

司馬遼太郎
え・中西勝

私は低山趣味で、十三才のときに大峰山にのぼっていらい、近畿地方の名ある低山は、ほとんどのぼった。

「これでも登山家だよ」

と人に自慢をする。ただし、日本アルプスは、のぼったこともないし、のぼろうとおもったこともない。絵ハガキをみるのも、きらいである。

そういう低山登山家が、中学四年の正月に六甲で遭難しかけた。拝賀式をおえると、急に低山にのぼりたくなり、級友四人をさそって、その足で六甲へ出かけた。

「おれ、朝めし食わずにきたがな」

「どうせ、山の上に茶店でもあるやろ」

大汗をかいて山頂にまでのぼると、元旦に六甲にのぼるばかはないとみえて、茶店は木戸をおろしていた。

「おかあちゃん」

と泣きだしやがった男がある。たべものがないとわかると、急に心細くなったにちがいない。下駄、というアダナの小男で、いま三菱の桂工場で、有能な機械技師になっているという。

腹がへると、歩けなくなった。私へのあてつけに、這いながら行くやつもあった。

「お前、なにを食うとる」

私が驚ろいてその男にきくと、男は、口を開けてみせた。ミカンの皮がいっぱい詰まっていた。むろん道でひろったものだ。

「では、近道しておりよう」

それがわるかったのである。人生のどういう場合でも、あせって近道をすると、ろくな結果にはならない。われわれは奥六甲にまよいこみ、道かと思って進むと断崖だったり、消えていたりした。

日が暮れ、体力がつきかけたころ、断崖の下に谷川が流れているのを発見した。

「この川床を歩こう」

川は、かならずふもとへ流れている。川の流域に人家が密集するのは、人文地理学の通念である。われわれは、川をつたっておもわぬ町に出た。宝塚市だった。

※

「こんどは、六甲にご案内します」

と、「神戸っ子」の五十嵐恭子さんが、三宮駅前から、私を自動車にのせた。

「先生、六甲ははじめてですやろ」

ばかにするな、と私は五十嵐さんをにらんだ。いくら神戸知らずの私でも、六甲だけはなんどかのぼっている。

「これも、神戸市灘区のうちでっせ」

六甲のよさは、多くの人によって説かれてきたが、その第一は、この山が市内にそびえているということだろう。

案内役として、洋菓子「ヒロタ」の広田定一氏と兵庫トヨタ自動車の中塚裕久氏と若林酒造の若林泰氏が、同行してくださった。若林さんは、関学と神戸大学とで日本史を専攻したひとで、六甲史にあかるい。

「六甲は、明治になってから外人がひらいたというほかは歴史がないんです」

「そこが六甲のいいところですよ」

と私はいった。

もともと、日本の名山というのは、ほとんど、僧侶がひらいた。ただしくいえば、修験者（しゅげんじゃ）がひらいた。

役（えん）ノ行者という山好きの超人が千四百年ほど前に出て、生涯山あるきをした。かれがひらいた著名な山は、富士山、御岳、大峰山、葛城山をはじめ、全国に数かぎりもなく、それらがすべて修験の行場になっている。

六甲山は、そうではない。

外人が、避暑のためにひらいた山である。

この山には日本の山にありがちな求道性もなく、哲学もない。哲学のはんらんする日本の自然のなかでは、めずらしい例である。

のぼる者に押しつけてくるそういう「観念」はなくて、この山では、あかるい緑の空気のなかで、若い人が安心して恋を語ることができる。中年の男は、仕事をわすれてクラブをふることができる。神戸が、世界の都市のなかでも、都市生活の条件がもっともすぐれているといわれていることの一つに、この六甲山の存在がある。

※

「哲学のない山で、わるうおましたな」

と、五十嵐さんがいった。この「神戸っ子」の編集者は、わるくちをいわれたと思って、はらがたったらしい。

「ないから、六甲はええのや」

高山趣味がいま日本を風ビしていて、かれらは、山へのぼるだけでなく、ヘリクツをつけながらのぼる。

山に哲学をくっつけるところは、大和の大峰山や木曽のオンタケサンにのぼる白衣の行者とかわらない。べつにわるいことではないがそういう哲学山のはんらんのなかで、

「喫茶店に行くかわりに六甲山に行こ」

というこの山の存在は、ありがたい。喫茶店山である証拠に、この山の道をのぼってゆくハイカーやドライバーは、どの顔も天真らんまんにゆるんでいる。

日本人は、緊張（テンション）民族だという。金剛杖をついて大峰山にのぼる行者や、ザイルをもって槍ケ岳にのぼる若人には、共通した一種の精神的緊張がある。その緊張は、山を偶像とみているところからくる。六甲という山は、人間を遊ばせてくれる日本で唯一の山である。

※

山頂から一気におりて、新聞会館の屋上でビールを飲んだ。神戸新聞の妹尾KCC部長が、

「なぜ、神戸から作家が出にくいのですかね」

といった。私は、たったいま山中にいたのにもう都心でビールを飲んでいるという神戸の快適な都市性を考えて、

「街がよすぎるんじゃないでしょうか」

といってみた。文学は精神を鬱屈させる風土のなかからうまれるとすれば、神戸は、あまりにも住みやすすぎるようである。

「むしろ作家などが出ないというのを、神戸は誇りにすべきじゃな

いですか」

私は六甲を考えた。

あのあかるい山から、大峰山が生んだ宗教体系は絶対にうまれないであろう。が、むしろ、そういうものがうまれないことが、六甲の特徴であり、誇りであり、われわれ関西の住人から愛され、かつ東京人からうらやましがられるゆえんではなかろうか。

※

どうも、この回はリクツっぽくなった。山をあつかうと、話がふしぎにリクツっぽくなる。

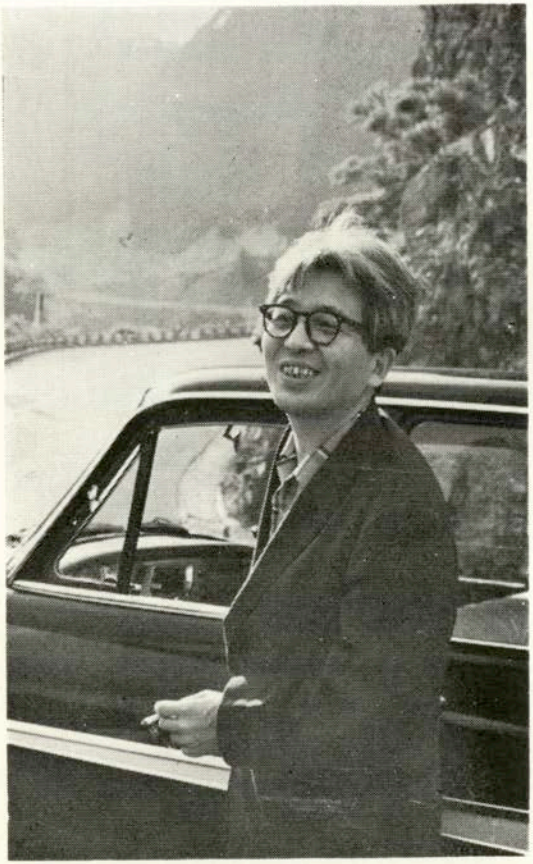
その夜、神戸新聞の青木氏、学校の先輩の神崎氏と三宮のクラブSという店で飲んだ。

「神戸は、いいでしょ」

女給さんたちがいった。一人は仙台のうまれであり、ひとりは九州の唐津の産である。

「良え。たしかに」

とはいったが、私はむろん本心ではない。こんな精神衛生にいい都会に住んだら、私のような人間は、小説を書かなくなってしまうだろう。



（写真は六甲山ドライブ、ウエイで
トヨペット、クラウンデラックスの前に立つ司馬氏）

レリーフ

日本画のホープ山手義正

神戸の画壇（一般にその近郊をも含めていっているが）では、圧倒的に洋画家が多い。では、日本画家はまるきりいないのかというと、そうではない。人数的には一洋画家には及ばぬにしても一かなり住まいしておられるのである。にもかかわらず、その動きはどうももう一つ振るわない。そんな中で、比較的活発に研究発表を行なっているのが美人画で知られた寺島紫明の門下生で作っているグループ〝明美会〟である。

山下義正君は、その明美会のメンバーの一人。寺島氏に師事しているのだから、同君がものする作品も当然〝美人画〟ということになるが、彼の意欲を買うのは、常に見た目に美しく、たおやかな情緒を持った、いわゆる従来の〝美人画〟から何とかして抜け出た作品を作りたいと心がけ、努力している跡がみられるからだ。〝今日〟を呼吸するみずみずしい、しかも生命力あふれた女性を描写することは、現在の日本画家として当然なさねばならぬことだろう。いろいろと〝美人画〟についてまわる制約の多いことだろうが、その上に立ってあえてその道を行こうとする、同君の意気たるやまさに壮――とカッサイを贈りたい。が、実は、現段階ではまだまだ古いキヅナにしばられている面が少なくないのである彼の作品の中の女性に生命を吹き込むためには、彼自身の位置もがそうである〝箱入り娘〟的場から飛躍して、時には他流試合的発表をも持っていいのではないだろうか。ともあれ、神戸の日本画の世界におけるホープの一人として、期待をかけたい人である。

（伊藤誠）

「扇の女」

花時計

Culourful-

松井高男

女性天国の夏がやってきた。むろん服装のことである。神戸の町にも涼しげに動く花びらのごとく色彩がはんらんしはじめた。だが女性ばかりではない。白一色で清潔さと色彩感覚の貧困？を誇りつづけてきた男性の間にも、ようやく色や柄がひろがりはじめたようだ。むろん、こういった傾向を、ひそかににがにがしくながめている人もいようが、単に服装の面だけでなく、古い男性・女性観はあらゆる面で崩壊しはじめ平等？化が行われており、自然な形で相互の基本的人権が尊重され出していることも見逃がしてはなるまい。色彩の自由な駆使を女性や若い世代の手だけにゆだねておくのは、もってのほかぐらいに考えてもよいことなのである。七色の男性用下着さえ出回っている近ごろのことだ。好みは別として買いたい人は大手を振って買えばよく、あたりを見回しながらおずおずと着用する必要はない。たいへんプリミティブな形でおそれいるが、昔は男性専用の〝赤フン〟なるものさえあったのである。先祖さまに負けてはなるまい。要は何を着ようと、どうしょうと、他人へのおせっかいはしないことが肝心だし、白が好きなら白、色ものが好きなら色ものを大いに楽しむべきなのだ。簡単なプライバシーの尊重はこのあたりからはじまる。

（神戸新聞学芸部長）

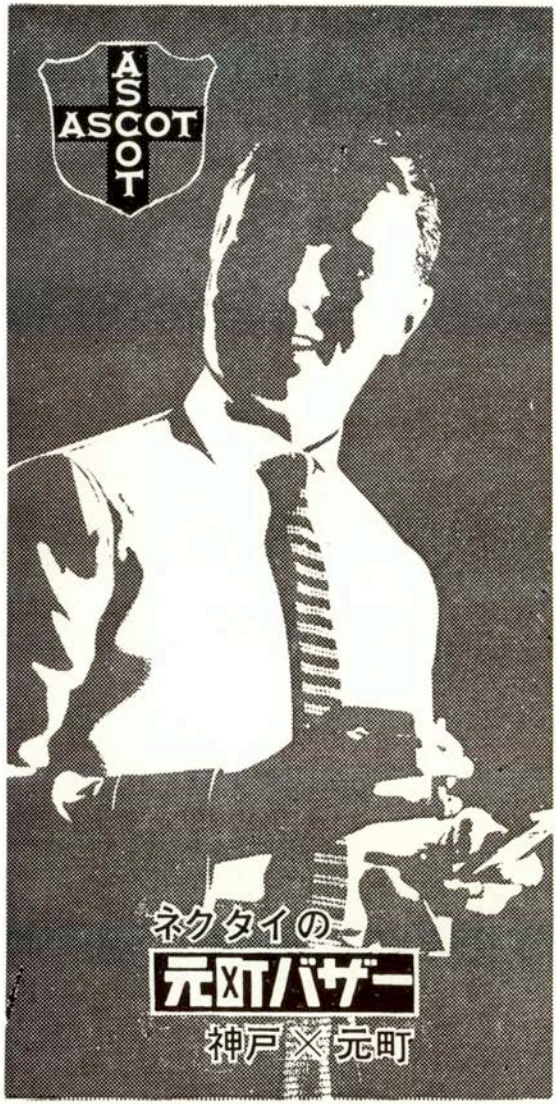
Water Proof
夏を呼ぶ防水時計

創業以来八十年
美田時計店
神戸市生田区元町三丁目
TEL. 三宮 (3) 1798

MENS' WEAR SHOP

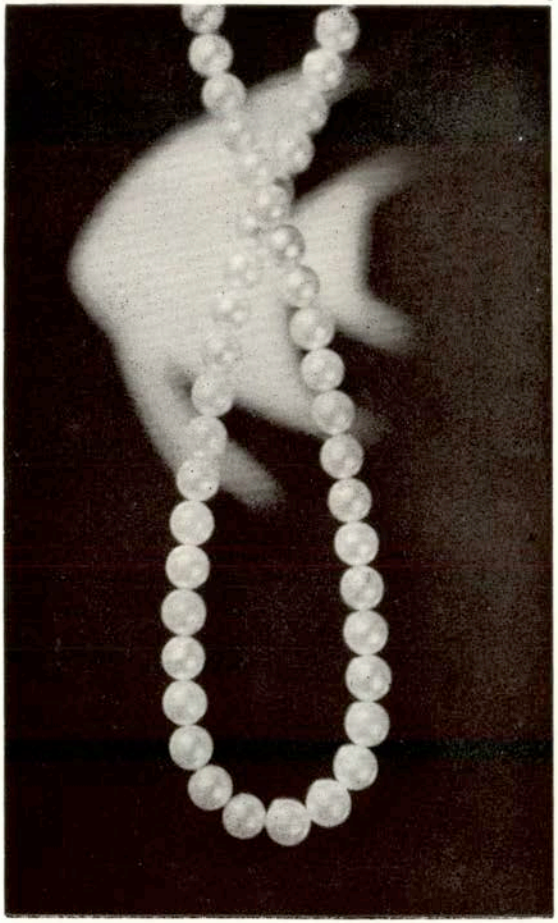
お中元の贈答品にオシヤレ用品を!!

紳士オシヤレ洋品
フナキヤ
元町 3 ③ 3617



田崎真珠店

神戸三宮新聞会館内
TEL（2）5646



神戸の学園 No. 3

高 県立神戸高校をたずねて

インドネシアで親善試合

伝統あるサッカー部

六甲、摩耶を背に、上野ケ丘にそびえたつ県立神戸高校は、伝統に輝く天下の名門、神戸一中と県一高女が合併して誕生した。

創立以来六十五年幾多の人材を輩出し、ますます力強く堂々の発展をたどっており『質素剛健』『自重自治』の伝統と精神に即し同校の自治会活動やクラブ活動の盛んなことは驚くばかりである。ことに、高山忠雄校長がスポーツマンだけに同校のスポーツ熱はたいしたもので、クラブの数も二十数部という。そしてそのなかでも四十八年の伝統をもつサッカー部の活躍はすばらしく、その成績と質は同校運動部のトップレベルといっても過言でなく、県下ではナンバーワン・チームといわれている戦前は、全国優勝八回、戦後は二十二年に一回栄えある優勝を遂げたのをはじめ、年々県下の覇権を握り、国体あるいは全国高校大会でも常に優秀な成績を堅持してきている。あらゆる分野で神中サッカー・クラブのOBたちが選手としてまたコーチとして活躍しているのも同部の特色だ。

四、五年前までは、オールジャ

パンの選手十一人のうち、ほとんどが神戸一中時代の先輩で占められていたという時代もあったほど同校のサッカーは、輝やかしい伝統をもっている。

現在、松村正義教諭を部長に、中川壮平（三年）主将以下二十五人の部員が、かって神戸一中サッカーの黄金時代を築いた頃の花形選手だった高山校長のコーチのもと〝ショートパス戦法〟といわれる同校得意のプレーの伝統を受けつぎ、毎日はげしい練習を重ねている。

そして今月中旬に、神戸インドネシア領事館と関西日本インドネシア協会の斡旋で、サッカーを国技とするインドネシアを訪問、ジャカルタ、バンドン、スラバヤ、マカッサルその他の土地の高校チームと親善試合を行なうことになっている。

目的は「日本・インドネシア両国高校間の親善と、青少年の交歓のため」に選ばれたものだが、旧一中時代からの名物―カーキ色の半ズボンと白の上着―という独得のユニホーム姿で、今回の役割りを立派に果してくれることだろう九月中旬には帰神する予定。

（写真右は勢揃いしたサッカー部員左はショートパス戦法の猛練習に励む部員たち）